



アメリカのストーリーテリングについて

前田 Dworkin 素子 (© 2010)

私は学生演劇とパントマイムの修業をへてアメリカでストーリーテリングを始めました。学生時代英語は好きなほうでしたが、まさか自分がこんなことを生業にするとは思ってもみませんでした。1993年ごろからアメリカの小中学校や図書館で子供たちに日本の民話をお話する仕事を続けています。2003年に全米ストーリーテリングフェスティバル（毎年10月にテネシーで行われます）に初出演して以来、大人向けのプログラムでもアメリカ各地をまわるようになりました。そこで知り合った同業者などからの情報をもとに、アメリカのストーリーテリングの歴史と現状、将来への課題を簡単にまとめてみたいと思います。

アメリカ先住民の長老が太古の昔から焚き火のそばで語ってきた神話や伝説、南部の黒人奴隷に受け継がれたアフリカの民話、アパラチア山脈の貧しい白人にかたりつがれたヨーロッパの昔話などがアメリカのストーリーテリングの源流といえるでしょう。それらのお話の一部は活字化されることによって保存されましたが、近代化の波にのまれて消えてしまったものも多いでしょう。そしてテレビや映画の普及に伴い「親から子へ、子から孫へ」といった口伝えの伝統はほとんど失われてしまいました。

ところが1950年代後半から60年代にかけて、ストーリーテリングのルネッサンスともいうべき復興の兆しが見え始めます。まずニューヨーク公共図書館で黒人司書としてはじめて児童書・サービス部の主任となったオーガスタ・ベイカー女史が、本の読み聞かせではない「おはなしの時間」を提唱しました。フォークシンガーのピート・シーガー、ギャンブル・ロジャース、アーロ・ガスリーなどを聴いて多くの人が弾き語りのおもしろさに目覚めました。ストリート詩人ブラザーブルーはボストンのハーバードスクエアに出没し「言葉のジャズ」といわれた独特の芸風で「ロミオとジュリエット」「みにくいあひろの子」などを語って人々を魅了しました。また南部アパラチア山脈の奥にひっそりと暮らす語り部レイ・ヒックスが昔話の宝庫として注目を集めました。

70年代にはいると、いわゆるプロとして学校や図書館、老人ホームなどでお話をする人も増えてきました。1973年テネシー州の小さな田舎町ジョーンズボロで、高校の先生をしていたジミイニール・スミス氏が発起人となって、第1回全米ストーリーテリングフェスティバルがおこなわれました。（スミス氏はのちにジョーンズボロの市長になりました。）その2年後には全米ストーリーテリング協会が設立されました。（この協会は現在2つの組織に分かれて、毎年夏の全米会議、秋の全米フェスティバル、機関誌の発行、その他の啓蒙活動をおこなっています。）



その後各地にストーリーテリングの普及を目的とする非営利団体が結成され、大小のフェスティバルが全国で開催されるようになりました。定期的集まって語り合う、ギルドと呼ばれるグループもあちこちでできました。ストーリーテリングを科目として教える大学もわずかながら出てきました。また日本の落語のような徒弟制度こそありませんが、ワークショップなどをつうじて、プロのストーリーテラーから学べる機会もふえました。

お話の内容もだんだんと多岐にわたるようになり、民話伝説はもとより、小噺やホラ吹き話、歴史上の人物になりきって演じるもの、自分の体験にもとづいた漫談のようなもの、文学作品を暗誦するもの、ギターやバンジョーの弾き語り、パペットやマイムをとり入れたものなどいろいろなスタイルが生まれました。同時に観客の層も厚みを増し、子供むけでない「大人の娯楽としてのストーリー」が提唱されるようになりました。1988年にコネチカット州でJGピンカートン氏によって始められたイベント「テラブレーション！」は、毎年11月の第3土曜日の夜、全国津々浦々で同時にストーリーコンサートを開くというもので、国境を越えて全世界に広がりました。（1995年には、元コネチカット在住の末吉正子さんによって日本にも伝えられています。）

より最近の潮流としては、1997年にニューヨークで始まったモス(The Moth)というイベントがあげられます。これはプロのストーリーテラーではない「普通の人」の「ちょっと変わった体験談」を楽しもうというもので、元はジョージ・グリーンと言う人が自宅の居間で友達を招いて始めたそうです。これが大変な人気をよび、今ではニューヨークのみならずロス、シカゴ、デトロイトでも毎週開催されています。目玉として著名な文化人や芸能人をよぶこともありますが、基本的には「普通の一般人」が「実際に経験したこと」を各10分ほどで話すというしくみになっています。コンテスト形式を取り入れたストーリーラムという企画などが若い世代の支持を集めており、同じような試みが他の都市でもおこなわれています。

またこの「普通の人々の体験談」こそ「貴重な歴史の証言」であるという考えから、オーラルヒストリープロジェクトも盛んにおこなわれています。大規模なものではストーリーコアという団体が2003年の創設以来、6万人のインタビューを録音・保存しており、一部はNPR（全米公共ラジオ）で放送されています。

さてここまでかけ足で見してきましたが、現在のアメリカのストーリーテリングの特徴として、次の3つの点があげられると思います。

まず第一に「個人の体験に基づいた話」が非常に重要視され、ジャンルとして確立されているという点です。いわゆるパーソナルストーリーといわれるもので、「ワシが子供じゃったころ.....」で始まるような思い出話から「昨日バスに乗っていたら.....」というようなものまで、まあ全部が事実でもないのかもしれませんが、ジョークや社会風刺をおりませたおもしろい話がたくさんあります。これは日本やヨーロッパでは私の知る限りほとんどおこなわれていません。（あえ



ていうなら、さだまさしさんがコンサートで曲のあいまに長いおしゃべりをする、あれに近いものがあると思います。それを楽しみに来るファンも多いそうですね。)

よく「アメリカは個人主義の国」といわれますが、これは「自分さえよければいい」という意味ではなく、「一人一人の個人的 (パーソナル) な体験」の中に「普遍的 (ユニバーサル) な価値」を見出すということなのでしょう。誰もが人に伝えたい物語をもっている。民主主義の社会なら、その一つ一つに耳を傾けるべきだということだと思います。「ひとり舞台に立って、自分の人生を語る」という作業はある意味「アメリカの本質」をあらわすものだといえるでしょう。

第二の特徴として、アメリカのストーリーテリングが多文化主義の影響を (十分ではないにせよ) うけているということがあげられます。私の見た限りどのフェスティバルやコンサートシリーズも一応、出演者の文化的多様性を念頭において企画されています。白人 (と一言でいっても、北部と南部、宗教や階層によって色々ちがうのですが) 黒人はもとより、アメリカインディアン、ヒスパニック系やアジア系も数は少ないながら積極的に起用されています。私もその恩恵を受けていると共に一翼を担っているわけですね。

まあアメリカは広いので場所によって客層も違います。たとえばテネシー州の全米フェスティバルには保守的で信心深いお年寄りが多く、ユタ州ではモルモン教徒の人たちが家族総出で来てくれるのですが、その子供たちのお行儀のよさは感動モノです。アトランタのティーンセンターでは参加者全員が黒人の中高生でした。これらの多様な観客にそれぞれ楽しんでもらうにはどうしたらいいのか、これが私の大きな課題であり、挑戦でもあります。

第三の点は、アメリカでストーリーテリングが単なる娯楽の枠をこえて、教育、医療など様々な分野で応用されていることです。たとえば小中高の教室では作文教育や歴史、文学の授業の一環としてストーリーテリングが使われています。(子供にお話を聞かせるだけでなく、子供自身にお話をさせることもあります。) カウンセリングや精神医療、企業研修、警察官の訓練、教会の牧師さんのお説教や政治家のスピーチにもストーリーテリングは活用されています。これはつまりストーリーテリングが人と人とをつなぐもっとも効果的な方法ということなのでしょう。そしてそれぞれの分野で個別に発展し、また合流する可能性があるということです。

最後にアメリカのストーリーテラーが直面している課題にはどのようなものがあるのでしょうか。(不況により芸術関連の資金、助成金などが減っているのはいわずもがなとして。)

パフォーミングアーツあるいはエンターテインメントとしての「語り」にはたかだか50年弱の歴史しかなく、音楽やダンスと比べてまだまだ市民権を得ていないのが現実です。「本を声に出して読むんですか」ときかれたり、「うちには小さい子供はいないのでけっこうです」と言われたり。公共団体に助成金などを申請する際も、ストーリーテリングという独自のカテゴリーがなく、演劇というくくりで応募しなければならないのが常です。生のストーリーの魅力をもっと多くの人に知ってもらうために一層の啓蒙、宣伝活動が必要です。



またリバイバルの初期から参加してきた語り手と観客の高齢化がすすんでおり、世代交代が必要となってきましたが、演者、観客共に若い人が少ないという問題があります。先人が作り上げたもの（お話のレパートリーを含めて）をどう受け継いで次世代に伝えていくのか。けっして儲かるとはいいがたい業界で若手をどう育成するのか。インターネット時代にいかに新しい観客層を開拓するのか。いずれも由々しき問題です。（日本の落語界の情報などに答えのヒントが見つかるかもしれませんね。）

そしてもう一つは、ストーリーテリングの発展を促す健全な「批評」のボキャブラリーが必要だということです。クラシック音楽やモダンダンスの例をみればわかりますが、よい批評（ほめるばかりでなく、的をえた批判を含めて）はアーティストを励まし、観客の理解を深めます。（もちろんくだらない批評もたくさんあるのですが。）個々の語り手の成長、変遷を縦糸、同世代との比較を横糸とし、歴史的社会的な視点をふまえた有意義な評価、評論がなされてほしいと思います。語り手、観客、イベント主催者を含む「ストーリーテリングコミュニティ」が、そのための語彙をこれから発見、発明していかなければなりません。

Motoko （前田 Dworkin 素子）プロフィール （www.folktales.net）

大阪府堺市出身。国際基督教大学卒。パントマイムを清水きよし氏、Tony Montanaro 氏に、ストーリーテリングを Elizabeth Ellis 氏に師事する。マサチューセッツ州立大学アジア言語学部日本語科講師をへて、1993年よりストーリーテラーとして全米各地の小中高、大学、図書館、美術館、フェスティバルをまわり、日本のや中国の民話、落語や禅に題材をとった小噺、自らの在米体験にもとづいたオリジナルの作品などを語っている。アメリカの有名な子供向けテレビ番組 Mr. Rogers' Neighborhood にパントマイムアーティストとして出演。2003年にはカーネギーホール主催の CarnegieKids の一員として宮崎県を巡演。同じく2003年、全米ストーリーテリングフェスティバルに（日本人としてはおそらくはじめて）出演。（その後2007、2011、2016年に再出演）ストーリーテリングのCDも4枚リリースしており、Parents' Choice Award, Storytelling World Award など各賞を受賞。数少ないアジア系の語り手の一人として活躍中である。2017年、全米組織である National Storytelling Network により「長年にわたってストーリーテリングに貢献し、その芸術的価値を高めた者に与えられる」The Circle of Excellence Award を受賞した。